



～松戸あれこれ物語～

左甚五郎伝説の巻

6年生が修学旅行で行った日光東照宮には、左甚五郎作の「眠り猫」の彫り物が奥社入口の階段下にあります。左甚五郎と言えば、江戸時代の有名な彫刻職人で、彫り物の動物が今にも動き出しそうなくらい精巧な作品であると言われていています。左甚五郎に関する摩訶不思議な伝説は、全国各地にあり、掘った作品だけでなく全国で腕をふるった



匠の職人たちの代名詞としても使われたと言われます。千葉県でも有名な話が流山市鱒ヶ崎の東福寺に伝わる「目つぶしの鴨」という話があります。松戸市内では、あまり知られていない話ですが、大金平にある広徳寺に伝わる左甚五郎作に関する彫り物の話があります。

以前、広徳寺のご住職から口頭でお聞きした話を以下に書きます。

昔、寺の近くに住む農民たちが田畑を毎夜のごとく荒らされてしまうことに困り果て、農家の人たちは見張りを立てることにしました。そうすると、どこからともなく虎が現れて、荒らしまわっていることがわかりました。

ある日の夜、トラは弁天様を祀ってあるお池で水を飲んだり水浴びをしたりしていました。見張りをしていたみんなで追い払うと、トラは広徳寺に逃げ込んだということです。農家の人達は、後から寺に入り尋ねると「そんな虎はいない」と言われました。仕方なく帰ろうとすると、寺にあった虎の彫り物がびしょりと濡れていました。もしかしたらということで、そのトラの目に釘を打ち付けたら、次の日から田畑は荒らされなくなったということです。

このトラの彫り物は、江戸時代の名人彫刻職人左甚五郎作だと言われていています。残念ながら50年ほど前に焼失してしまったということです。

この話を聞いたのは、平成12年の8月のことでした。



